

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K17606

研究課題名(和文) 実践コミュニティ間の越境をともなった日本語学習者の学びに関する基礎的研究

研究課題名(英文) A Fundamental Study on the Learning of Japanese Language Learners with Crossing Borders between Communities of Practice

研究代表者

島崎 薫 (Shimasaki, Kaori)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：70746966

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、海外の日本語学習者の越境のプロセスと、そこでのアイデンティティの変化を明らかにすることを目的としていたが、予備調査から実施が難しいことがわかり、海外で日本語を学ぶ学習者の日本という文脈での越境に対象を変え、彼らの越境過程とアイデンティティの変化を明らかにすることを目的とした。複数の越境の成功事例に着目し、そこでの学習者の越境の過程、そしてアイデンティティの変化を考察した。異なる文脈や背景を持つ学生たちの協働プロジェクトという形での越境の事例も考察し、そこでの学習者の学びを考察した。そして個人単位の越境だけでなく、グループ単位の越境も調査対象とし、そこでの学びについて考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語学習の学びは、言語的知識やスキルの獲得に焦点が当てられがちであるが、学習者の考え方やものの見方、価値観が変わるなどといった越境によって得られた学びを取りあげ、そのプロセスに着目したことに大きな意義がある。越境、越境的学習がうまくいった学習者の例を取り上げることで、その成功の鍵となることは何であるのかについても検討し、複数の文脈やコミュニティに属しているブローカーからの支援に着目して考察した。また、越境は、様々な形態があることから、本調査でも多様な形態の越境を取り上げ、事例研究した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the process of border-crossing among overseas learners of Japanese and the changes in their identities there. However, preliminary research revealed that it would be difficult to conduct such a study, so we changed the focus of the study to the cross-border crossing of overseas learners of Japanese in the context of Japan, with the aim of clarifying their cross-border process and changes in identity. The study focused on several successful cases of border-crossing, and examined the process of border-crossing and changes in the identities of the students. We also considered cases of border crossing in the form of collaborative projects among students from different contexts and backgrounds, and examined the learning of the learners in these cases. The study also examined the learning that takes place not only in the context of individual crossings, but also in the context of group crossings.

研究分野：日本語教育学

キーワード：越境 越境的学習 アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

学習者がどのように学んでいるのかは、言語学習の研究においていつも取り上げられるテーマである。学習とは個人が知識を蓄積していくことと考えられ、教育は教師から学習者への一方的な知識や技術の授受と捉えられてきた従来の考え方に代わって、学習者は社会で他者との相互行為に参加する存在として考えられるようになり、社会の中で人やものやりとりする中で学びは起こるといふ社会文化アプローチに則った学習観で捉えられるようになった。言語学習でも、90年代後半から社会文化アプローチに基づいた実践コミュニティ(Community of Practice: CoP)という概念を用いて、学習者の学びを捉える研究が増えている。CoPとは、「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を持続的な相互交流を通して深めていく人々の集団」(Wenger 他 2002: p.4)であり、学びはアイデンティティの変化と捉えられ、CoPへの参加を通して人やものやりとりし、技能や知識を身につけたり、新たな知を創造したりしながら、アイデンティティを発展させていくことと考えられている(Lave and Wenger, 1991)。

近年、言語教育の分野で、学習者はCoPの中でどのように言語を学ぶのか、教室内やオンラインのCoPなどを対象にして様々な研究がなされてきた。筆者もこれまであまり焦点が当たっていなかった教室外において、海外の日本語学習者たちが自分で作ったCoP内で、日本語をどのように学んでいるのか、アイデンティティの変化に着目して調査し、そこでのアイデンティティの変化と学びについて明らかにした。しかし、1つのCoP内だけでの学びの研究には限界がある。というのは、学習者たちは実際の生活で複数のCoPを行き来し、それぞれのCoPで日本語の使用と学びを繰り返し行っており、1つのCoPでの学びを調査しただけでは、全体の中の一部だけを捉えただけにすぎないからだ。

2. 研究の目的

そこで本研究は、日本語を使用するコミュニティが限られている海外の日本語学習者のCoP間の越境とアイデンティティの変化のモデルの作成を目指し、まずは豪州の日本語学習者のCoP間の越境のプロセスと、そこでのアイデンティティの変化を明らかにすることを目的とした。

しかし、2017年に予備調査を実施したところ、豪州大学での学習者の越境の様子を即時的に調査することが難しい状況が分かり、代替策として豪州大学の日本語の元学習者5名にライフストーリーインタビューを実施したが、この手法では越境の詳細について明らかにすることは難しいことが分かった。また学習者の越境も、CoP間に限らず、文脈やコミュニティなど多様な場の形態として捉える必要があることも見えてきた。そのため、2018年度からは、CoP間に限らず、海外で日本語を学ぶ学習者が日本という文脈で、どのような越境をし、アイデンティティを変化させたのかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

上記の目的を明らかにするために、2017年の予備調査の際に生じた調査の限界を踏まえ、調査者が継続的に参与観察できる活動で起きている越境を対象とすることとし、以下の2つのフィールドでデータ収集することとした。

(1) 日本の大学に留学した日本語学習者の地域の祭りを通じた地域コミュニティへの越境

(2) アメリカで日本語を学ぶ学習者の日本の大学の学生との東日本大震災の被災地での協働プロジェクトへの越境

(1)は、日本語学習者が毎年開催されている地域の祭りに踊り手として参加したことで起きた越境である。2名の学習者(マイケル、ジェニー)の越境を取り上げた。マイケルは、大学としての祭りへの参加をきっかけに地域のコミュニティへ参加するようになった学習者の事例である。ジェニーは、必修の日本語の授業を受けつつ、授業の一環として地域の祭りに参加した学習者の事例である。(2)はアメリカから短期プログラムで来日した日本語学習者と日本の大学の学生との協働プロジェクトを実施した際に起きた越境での学びを調査対象とした。ここでのプロジェクトは、東日本大震災の被災地に行きインタビューするというもので、このプロジェクトではアメリカと日本の学生と一緒にプロジェクトを行ったことで起きた越境と、被災地という文脈にともに入ることによる越境があった。

香川(2008, 2015)によると、越境には様々なタイプがある。時間的に前後する形で文脈間を渡り歩く状況間移動、その中でも単一方向で活動間を移動するものを直行移動、比較的同時期に複数の活動間を移動(往復)するものを並行移動と呼んでいる。また、ある文脈に留まりながら他の文脈に潜在的、間接的、一時的にアクセスするものを間接横断と言い、複数の文脈が時間や空間を隔てず重なり合うハイブリダイゼーションとしている。これを踏まえると、本研究では、(1)のマイケルの事例は状況間移動の直行移動であり、ジェニーは並行移動の事例である。(2)は異なる文脈や背景を持つ2つの大学の学生たちが協働でプロジェクトに取り組んだということで、ハイブリダイゼーションという形態での越境となっている。また、その両大学の混合グル

ープが被災地という文脈へグループごと越境した直行移動となっている。このように、今回の研究では、香川(2008, 2015)で示されているような様々な形態の越境を調査対象とし、また個人単位の越境だけではなく、(2)の被災地への越境のようにグループ単位での越境も取り扱った。

調査方法は、半構造化インタビューを中心に行ったが、調査者が可能な範囲で参与観察も行い、データとした。

4. 研究成果

(1) 日本の大学に留学した日本語学習者の地域の祭りを通じた地域コミュニティへの越境

マイケルの事例

この事例では、大学としての祭りへの参加をきっかけに地域のコミュニティへ越境(直行移動)した学習者をとりあげ、その越境の軌跡を明らかにするとともに、その越境を手助けしたブローカーについて考察した。ブローカーとは、同時に複数のコミュニティのメンバーでありながら、あるコミュニティの実践を他のコミュニティに仲介し、伝播させる存在であるとされている(Wenger 1998)。マイケルは、越境の過程でブローカーの役割を果たす特定の1人ではない複数人と様々な段階で出会い、支援を受け、ときには自ら相手から支援を引き出し、地域社会への越境を果たしていることがわかった。また、母国から日本の大学院へ、そして地域社会へと越境は大きく2段階に分かれていたことで、1つ目の越境の経験をもとに2つ目の地域社会への越境を自分の力で切り拓いていくことができたと考えられる。

ジェニーの事例

この事例では、日本語のクラスと地域の祭りという文脈の行き来(並行移動)を通して、どのようなアイデンティティの変化が起こり、水平的学習が起こったのかについて考察した。S大学に所属し、日本語を学びながらも自身を【手続き上はS大学の学生】【よそ者】と捉えているジェニーが授業の一環で地域の祭りに踊り手として参加したことでどのような変化が起きたのかを考察した。ジェニーは日本語の授業を受け、日本語の知識やスキルといったことは学んでいたものの、日本語を使うコミュニティへの所属意識はなく、日本語にもコミュニケーションツールとしての価値をさほど見出していなかったと思われる。しかし地域の祭りに関わるようになり、地域の練習会に参加したり、本番の祭りを経験したりすることで、【その街の一員】であるという意識を持つことができた。その新しいアイデンティティによって日本語を学ぶ価値が生まれ、日本語に対する見方が変わった。

(2) アメリカで日本語を学ぶ学習者の日本の大学の学生との協働プロジェクトへの越境

異なる文脈や背景を持つ2つの大学の学生たちの協働

この事例では、異なる文脈や背景を持つ2つの大学の学生たちが混合でグループをつくり、活動するというハイブリダイゼーションという形での越境である。この越境により異文化を背景とするコミュニケーションについて、異文化間で協働作業することについて学びが起こったようである。まず、異文化を背景とするコミュニケーションについては、学生の詳細なやりとりに関してトランスランゲージングという概念を用いて分析した。そこからは互いが持っている言語資源を生かし、スキャフォールディングを出しながら作業をしていることで、互いに学びの機会を作っていたことが明らかになった。異文化間で協働作業することについては、違和感を感じたところは面倒くさながらに共有することの大切さ、お互いに補い合いながら協働作業することの大切さを学んでいた。

被災地への越境

この協働プロジェクトでの越境は、混合グループをつくったことによるハイブリダイゼーションだけではなく、そのグループが被災地という文脈にグループごと越境したこと(直行移動)も含む。被災地への越境は、両大学の学生に大きな影響を与え、上記のハイブリダイゼーションを引き起こす大きな動機ともなっていた。参加した学生たちは、被災地のインタビュー協力者の方々の東日本大震災への思いに強く心打たれ、ときには感化され、感銘を受けていた。同時に、インタビューで聞いた話を世界に、後世に伝えたい、伝えなければならないという使命感持ち、その思いが、上記のハイブリダイゼーションで起こった言葉の壁や文化背景の違いを乗り越える動機となっていたことが明らかになった。

このように本研究では、海外で日本語を学ぶ学習者が日本という文脈での越境に関して、状況間移動の直行移動(マイケルの事例)、並行移動(ジェニーの事例)の事例を取りあげ、そこでの学習者の越境の過程、そしてアイデンティティの変化を考察した。また、異なる文脈や背景を持つ学生たちの協働プロジェクトという形で、ハイブリダイゼーションという形態での越境の事例も考察し、そこでの学習者の学びを考察し、トランスランゲージングの概念を用いて、学生たちのやりとりを分析した。そして個人単位の越境でだけではなく、グループ単位の越境も調査対象とし、そこでの学びについて考察した。今回取り上げた事例は、越境がうまく行き、学習者が何らかの学びを得られた事例ばかりであった。限られたデータではあったが、ある種の成功事例として海外で日本語を学ぶ学習者が日本という文脈で、どのように越境し、アイデンティティを変化させていたのかを明らかにすることに限定的ではあるが、寄与できたと言える。その一方

で、越境は石山・伊達(2022)の中でも1割うまくいけば良いと書かれている。多くがうまくいかなかった事例であることを考えると、成功事例だけではなく、越境を果たすことができなかった、越境しても学びにつながらなかった事例も対象として研究を進めていく必要がある。

また、香川(2008、2015)が分類するところの間接横断、つまりある文脈に留まりながら他の文脈に潜在的、間接的、一時的にアクセスするという越境は扱うことができなかった。こちらも今後の課題として引き続き調査を進めていく予定である。

[引用文献]

石山恒貴・伊達洋駆(2022)『越境学習入門 組織を強くする「冒険人材」の育て方』日本能率協会マネジメントセンター。

香川秀太(2008)「複数の文脈を横断する学習」への活動理論的アプローチ—学習転移論から文脈横断論への変異と差異—, 心理学評論, No.52, pp.463-484.

香川秀太・青山征彦(2015)『越境する対話と学び』新曜社。

Lave, J. and Wenger, E. (1991) *Situated learning: Legitimate peripheral participation*, London: Cambridge University Press

Wenger, E., McDermott, R. A., & Snyder, W. (2002). *Cultivating communities of practice: A guide to managing knowledge*. Harvard Business Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 島崎薫・ブレフューメ裕子・渡部留美	4. 巻 8
2. 論文標題 東日本大震災の被災地での日米の大学生による国際共修プロジェクト 被災地に暮らす人々の魅力を発信するHumans of Minamisanriku	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語教育実践 イマ×ココ	6. 最初と最後の頁 52-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島崎 薫	4. 巻 24
2. 論文標題 ある留学生の日本留学における地域社会への越境的学習の軌跡	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 留学生交流・指導研究	6. 最初と最後の頁 21～34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57511/coisan.24.0_21	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Kaori Shimasaki
2. 発表標題 Rethinking language learning: From the perspective of cross-boundary learning
3. 学会等名 THE 2nd INTERNATIONAL CONFERENCE ON EDUCATION, LANGUAGE, AND SOCIETY (ICELS2) (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 島崎薫
2. 発表標題 日本語学習者が地域に越境したことで何を学んだか：地域住民とともに取り組んだ仙台すずめ踊りの実践をもとに
3. 学会等名 2019年東北アジア国際語言文化研究基地年会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kaori SHIMASAKI
2. 発表標題 How Do Brokers and Boundary Objects Assist Boundary-Crossing?: A Case of a Philippine Student in Japan
3. 学会等名 Japanese Studies Association of Australia Biennial Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 プレフューメ裕子・島崎薫
2. 発表標題 日米間学生協働プロジェクトの成果と課題: 「Humans of Minamisanriku」実践報告
3. 学会等名 アメリカ日本語教師会2019年春季大会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島崎 薫・小島 卓也・福井 なぎさ・トムソン木下 千尋・田嶋 美砂子・大原 哲史
2. 発表標題 ことばを学ぶ学習者たちの越境 彼らはどのように境界を越え, 何を学んだのか
3. 学会等名 言語文化教育研究会第9回年次大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 尾辻恵美、熊谷由理、佐藤慎司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 304
3. 書名 ともに生きるために	

1. 著者名 佐藤智子, 高橋美能, 江口怜, 島崎薫, プレフューメ裕子, 菊池遼, 藤室玲治, 縣拓充	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 210
3. 書名 多様性が拓く学びのデザイン：主体的・対話的に他者と学ぶ教養教育の理論と実際	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------